

大 池 南 遺 跡  
沖代地区条里跡 矢永地区・五唯地区  
中津城本丸南西石垣(Ⅲ)

2003年度 中津地区遺跡群発掘調査概報16

中津市文化財報告 第34集

2004

中津市教育委員会

## 例　　言

- ・、本書は中津市教育委員会が2003年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
- 一、調査は2003年度国宝重要文化財等保存整備事業費および2003年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

### 一、調査主体 中津市教育委員会

・、調査責任者 武吉 勝也（中津市教育委員会教育長～2003年11月20日）  
城戸崎九一（中津市教育委員会教育長代理者  
中津市教育委員会管理課長2003年11月21日～2004年3月1日）  
影木莊一郎（中津市教育委員会教育長2004年3月2日～）

調査委員 後藤 宗俊（別府大学教授）  
豊田 寛三（大分大学教授）

調査指導 渋谷 忠章（大分県教育庁文化課参事 兼 課長補佐）  
小林 昭彦（同 主幹 兼 文化財管理係長）

調査事務 尾畠 豊彦（中津市教育委員会市民文化センター課長）  
田中布由彦（同 係長）  
富田 修司（同 主査）

調査担当 高崎 章子（同 主査）  
浦井 直幸（同 賦記）

上記の他、北垣聰一郎氏（元東大阪短期大学教授）、高瀬哲郎氏（佐賀県立名護屋城博物館学芸課長）、梅崎恵司氏、佐藤浩司氏（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室学芸員）他多数の方々よりご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

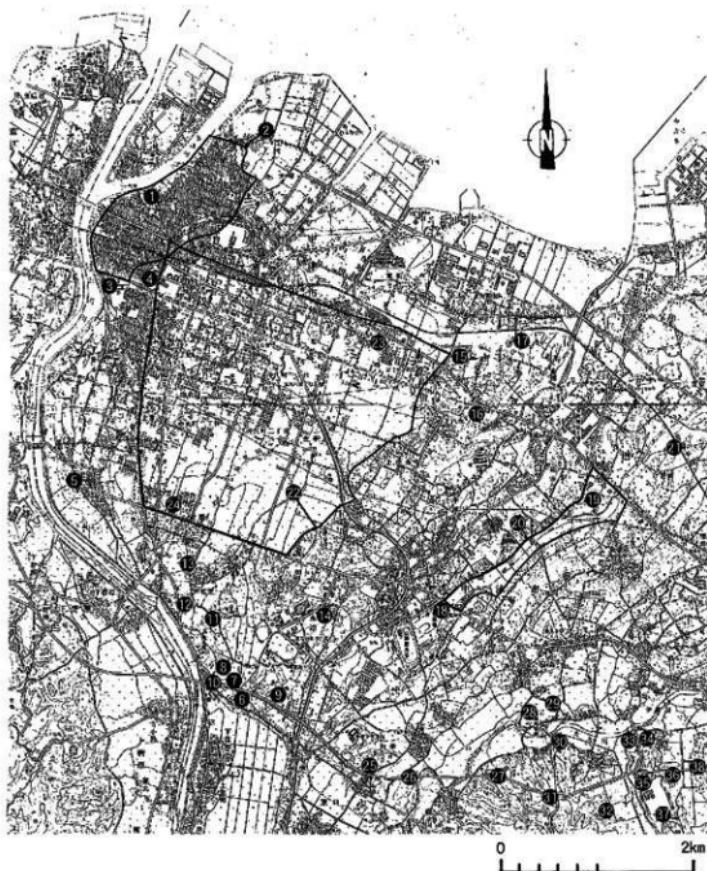
- ・、大池南遺跡・沖代地区条里跡の調査は浦井直幸が、中津城の調査は高崎章子と浦井直幸が行った。

- 一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章、第4章を高崎が、第2章、第3章を浦井が担当した。
- 一、製図は上記担当者の他、塙谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子が行った。
- 一、現場作業及び遺物整理は下記の皆さんの協力による。  
山縣信夫、石塔美代子、中村香代子、田中トミ子、瀬口礼子、中村恵美子、阿部恵子、川口政代、江藤清子、中島祐子、畠野常昭、田原文子、福住摂子、塙谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子

## 目 次

第1章 地理と歴史的環境 .....	1
第2章 大池南遺跡 .....	3
1. 調査に至る経緯 .....	3
2. 調査の概要 .....	3
3. 各トレーニングの概要 .....	4
4.まとめ .....	4
第3章 沖代地区条單跡 .....	5
1. 調査に至る経緯 .....	5
2. 調査の概要 .....	5
(1) 矢永地区 .....	5
(2) 五唯地区 .....	6
第4章 中津城本丸南西石垣 (Ⅲ) .....	13
1. 中津城の歴史と石垣について .....	13
2. 調査に至る経緯 .....	14
3. 工事の概要 .....	14
4. 13年度、14年度調査の概要 .....	15
5. 15年度調査の概要 .....	15
(1) E面石垣 .....	15
(2) 椎ノ木門南調査区 .....	20
(3) H面石垣 .....	23
(4) 出土瓦について .....	24
6. 今後の課題 .....	25
写真図版 .....	27

## 第1章 地理と歴史的環境



- |            |             |             |             |            |
|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 中津城     | 9. 大池南遺跡    | 17. ガラヌノ遺跡  | 25. 黒水遺跡    | 33. 城山横穴群  |
| 2. 中津城下町遺跡 | 10. 上ノ原横穴墓群 | 18. 藤神社     | 26. 大坪遺跡    | 34. 城山古墳群  |
| 3. 高畠遺跡    | 11. 相原山首遺跡  | 19. 原遺跡     | 27. 森山遺跡    | 35. 城山窯跡群  |
| 4. 豊田小学校遺跡 | 12. 三口遺跡    | 20. 大悟法条理   | 28. 福島遺跡    | 36. 草場窯跡   |
| 5. 高瀬遺跡    | 13. 相原庵寺    | 21. 定留貝塚    | 29. 福島地下式横穴 | 37. 大谷窯跡   |
| 6. 上ノ原平原遺跡 | 14. 長者屋敷遺跡  | 22. 沖代地区条里跡 | 30. 洞ノ上横穴群  | 38. 蘭ヶ迫窯跡群 |
| 7. 勉助野地遺跡  | 15. 龜山古墳    | 23. 矢永地区    | 31. 洞ノ上窯跡   |            |
| 8. 弁旗邸古墳   | 16. 石堂池遺跡   | 24. 五唯地区    | 32. 才木遺跡    |            |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

## 第1章 地理と歴史的環境

中津市は、大分県北部、福岡県との県境の商業都市で、人口約6万7千人、面積約55.67km<sup>2</sup>である。一級河川の山国川河口に位置し、北は遠浅の周防灘を望む。山国川の造る扇状地「沖代平野」と、市の東南をしめる洪積台地「下毛原台地」とに分かれ、山間部は市の南に隣接する三光村境にわずかにある。東は古代強力な政治力を誇った宇佐八幡宮が座す宇佐市に隣接している。

市内の旧石器時代は才木遺跡や大坪遺跡で石器を確認できるのみである。縄文時代では早期後半に黒水遺跡で陥れ穴が検出された。遺跡数が増大するのは後期からである。犬丸川沿いの福島台地には、入垣貝塚を伴う集落のボウガキ遺跡、山国川沿いには三光村の自然堤防上に佐知遺跡の集落がある。山国川河口付近では高畠遺跡で土偶が発見された。弥生時代になると、遺跡は台地上や沖代平野内の低地でも確認できる。前期後葉から中期初頭、山国川沿いの低丘陵上の上ノ原平原遺跡で、貯蔵穴群が検出された。中期になると犬丸川沿いの福島遺跡で集落が展開し、住居跡、濠と二列埋葬の土坑墓群が確認されている。また中津市と三光村にまたがる森山遺跡では前期末から後期初頭までの集落全域を検出できた。古墳時代には沿岸部や山国川沿いに古墳、横穴が築かれ、微高地には住居が作られる。沖代平野の低湿地では水田も確認されている。牛廻遺跡としては南東部の山地に大規模な窯跡群が作られ、6世紀後半から8世紀にいたるまで、須恵器、瓦などが生産された。

古代史上主要な遺跡は市内南部を東西に横切る推定古代官道沿いに集中する。この道は宇佐八幡宮へ向かう勅使が通る通称「勅使街道」であり、当時のメインストリートである。道の南、山国川の東岸に、白鳳寺院の相原庵寺跡がある。また沖代平野では、おそらくとも8世紀前半に県下最大級の沖代条里の地割りが制定された。条里は年々開拓の波に押されているが、現在でも方形の区割りをたどることができる。この条里を見下ろす低台地上に、下毛都御正倉に比定される長者屋敷遺跡がある。長者屋敷と相原庵寺の間には、古墳時代から近世まで続く墓地群相原山首遺跡があり、古代の蔵骨器を持つ方墳は郡司の墓に推定されている。

犬丸川沿いで鎌倉時代の集落が検出された。特に前田遺跡では井戸から青磁、白磁、瓦器碗、土器器などの良好な一括資料が得られた。中世の建久年間には、宇都宮氏が豊前に入り、その庶流が下毛郡の地頭職についた。15、16世紀には市内各地に堀や土塁をもつ豪族居館が作られ、各所にその痕跡を残す。近年の調査では、石堂池遺跡、定留遺跡、諸田遺跡などで城館跡が新たに確認されている。長者屋敷遺跡にも16世紀に八並城が造られ、堀や土塁は今もたどることができる。宇都宮重房は野仲郷を本貫とし、以後16世紀末まで、野仲氏が勢力をふるった。八並城も野仲氏に攻め落とされている。しかし、16世紀末、秀吉から農前をもらった黒田氏が山国川の河口に中津城を築き、宇都宮氏をはじめとする地元の豪族を次々に打ち破り、江戸時代を迎えた。中津城は一国一城令後も生き残り、河川の城を中心に城下町が発展していった。現在城内に当時の建物は残っておらず、石垣や堀が往時をしのばせるのみである。近年、殿町、諸町などで城下町の調査が相次いでいる。中津城の石垣も平成13年度より復元工事とともに発掘調査を行っており、中津城と城下町の姿が徐々に解明されてきている。

## 第2章 大池南遺跡



第3図 大池南遺跡周辺図 (S=1/25,000)

### 1. 調査に至る経緯（第3図）

大池南遺跡は、中津市の南端を走る10号線中津バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において昭和55（1980）年に発見された遺跡である。遺跡からは弥生時代前期末と考えられる堅穴住居、溝が各一基確認されている。

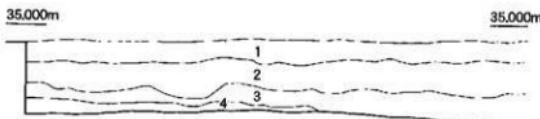
今回、当遺跡地に老人ホーム建設が予定されたため、試掘調査を実施した。

### 2. 調査の概要

調査区は東西に長く、現地は飼料用のトウモロコシ畑であった。建設予定の老人ホームは、木造家屋であり地下の埋蔵文化財に影響を与える恐れはないことから、建設により切土される範囲を中心にトレンチを12本設定した。結果として、弥生上器と思われる遺物の小片4点を確認したのみで明確な遺構・遺物は検出されなかった。



第4図 大池南遺跡トレンチ配置図 (S=1/1,500)



第5図 第3トレンチ東壁土層図 ( $S=1/50$ )

### 3、各トレンチの概要（第4図）

第1・2・4・5・9・10トレンチは、地表面から約20~30cmでこの地域の地山面である橙色土に至る。また、第2・5トレンチからは耕作機による幅50cm、深さ10cmの溝を検出している。第3トレンチは、前述のトレンチとは様相が異なる。第5図は第3トレンチの東壁上層図であり、1は、暗色砂質土の耕作土。2は、暗茶褐色粘質土。3は、暗色粘質土。4は、橙色粘質土である。地表面から1mで地山面に至ることが前述トレンチとは異なる。第6トレンチも第3トレンチと同様の様相。第7トレンチは、1.8m掘り下げ地表面から約20cmは耕作土、その下層は厚さ30cmの暗茶褐色粘質土、コンクリート片を含む厚さ50cmの黒色粘質土と続き、厚さ80cmの暗黒色粘質土に至る。第8トレンチは、搅乱層は認められなかったものの第7トレンチと同様の様相を呈す。第11・12トレンチは、地表面から1m掘り下げ、黄色粘質土と黒色粘質土が斜め方向の4層の状態であることを確認した。

トレンチ設定後、地主の方にお話を伺ったところ、調査区東側は畑地造成のため土地を重機で押したとのことであった。また、第7・8トレンチ付近は以前谷になっており客土をもって埋め、第11・12トレンチ付近は以前盛り土を行ったとのことであった。

### 4、まとめ

以上、土器片の出土など遺跡の痕跡は認められるものの明確な遺跡の存在は確認できず、当地が畑地造成等で掘削を受けていること、谷部であったことなどを考慮して当地に遺跡は存在しないものと判断し調査を終了した。また、第2・3トレンチ東側の調査区外は現状で約1m程土地が高い。それが当時の土地の高さとすると、調査地東側は畑地造成のためかなりの掘削を受けたことも考えられる。また、各トレンチの状況から地山面は、調査地東側から第7・8トレンチ付近に向け急角度で下り、第9トレンチ付近で再び上昇に転じるという凹状の谷部を形成していたと思われる。第11・12トレンチ付近では、1m掘り下げても地山面を検出できないことから再び地山面は下降に転じ谷部を形成したことと考えられる。

#### [参考文献]

江田豊「人池南遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』大分県教育委員会1988

### 第3章 沖代地区条里跡



第6図 沖代地区条里跡周辺図 (S=1/25,000)

#### 1、調査に至る経緯(第6図)

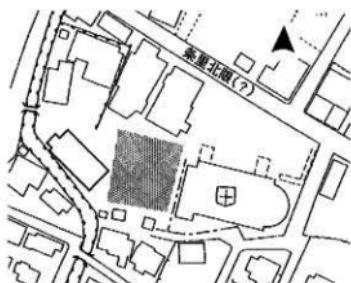
沖代条里跡は、開発によりその環境が急激に変化しつつある。今回、矢永地区、五唯地区において開発行為が行われることとなり試掘調査を実施した。矢永地区は病院施設建設であり、五唯地区は賃貸マンション建設である。

#### 2、調査の概要

##### (1) 矢永地区(第7図)

調査地点は、中津市街地の東部、推定条里北限と考えられている県道に近接する<sup>(1)</sup>。

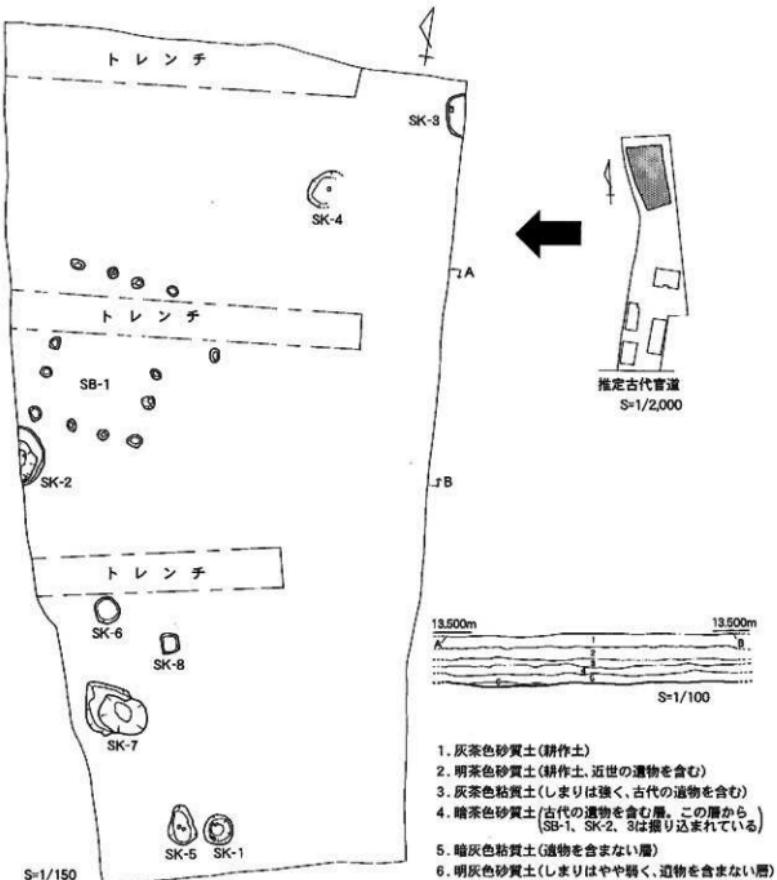
調査方法は、重機によるトレンチ掘削とし、幅2m、長さ約15m、深さ1mの南北トレンチを東



第7図 矢永地区調査地点 (S=1/2,500)

西に並ぶ形で二箇所設定した。調査の結果、西側トレンチは、地表面から下60cmはコンクリートを含む客土であり、それより下層は上から厚さ10cm程の水田屑、3~5cmの赤褐色砂質土、30~35cm程の暗茶褐色砂質土を確認した。それより下は、川原石を大量に包含していた。以上の層から遺構、遺物は発見できなかった。東側トレンチは、地表面から60cm程は暗色砂質土であり近代の遺物が散見され、それより下層は、西側トレンチ同様礫が大量に検出された。調査地には近代に家屋が存在したことがあり、これらの遺物はその民家で使用されていたものと考えられる。調査の結果、遺跡は存在しないと判断して調査を終了した。

## (2) 五唯地区（第8図）



第8図 五唯地区遺構配置図、土層図

調査地点は、条里の南限と考えられている推定古代官道沿いに位置する。重機によるトレンチ掘削の結果、遺構が検出されたため、試掘範囲を拡張して調査を実施した。調査の結果、古墳時代の掘立柱建物跡（以下SBとする）1棟、土坑（以下SKとする）4基、古代の土坑1基、遺物を含まないため時期を特定できない土坑3基を確認した。

### ① 古墳時代

#### 1) 掘立柱建物跡

##### SB-1（第9図）

調査区の中央に位置する南北棟の掘立柱建物であり、東柱のない側柱建物である。トレント掘削時、柱穴を確認できないまま掘り進んだため、梁行3間、桁行4間もしくは5間と推定される。柱間寸法は心心距離で梁行長約3.2m、桁行長約4.8mである。身舎面積は約15.4m<sup>2</sup>である。柱穴は梢円形で規模は径約30~48cm、深さは最大のもので約52cmを測る。Pit 1から第11図-1の須恵器が出土している。

#### 2) 土坑

##### SK-1（第10図）

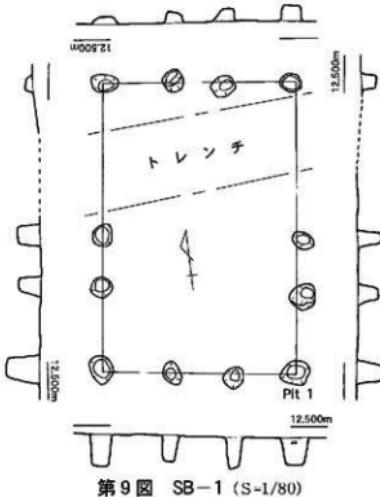
調査区の南側に位置する。径約90cmの円形土坑。深さは106cmである。平面形態は円形状を呈し、床面は平坦である。床面近くで10cm大の礫が6~7個壁面から張り出す形で検出された。壁面は急角度で立ちあがる。上坑内からは、精製胎土の土師器の椀が出上している<sup>10</sup>。

##### SK-3（第10図）

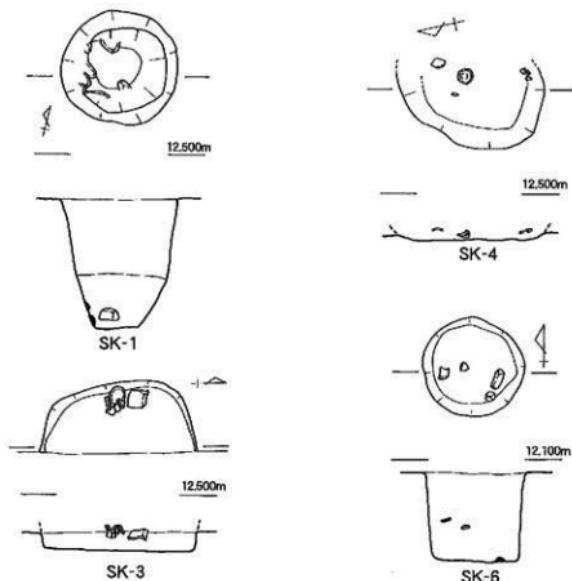
調査区の北東端に位置する。遺構の半分は調査区外のため全容は不明であるが、現状で最大長130cmを測る。床面は平坦、壁面は急角度で立ち上がる。土坑内からは土師器の甕とそれと同一個体であったと思われる甕の破片が3~5点確認された。それらの破片は10cm大の礫を覆うような状態で検出された。

##### SK-4（第10図）

調査区の北側、SK-3の南西側に位置する。遺構埋土が包含層土と酷似し、遺構の存在を認識できないまま掘り進んだため当時の掘り方とは検出できていない。現状で平面形態は梢円形、最大長124cmである。床面は平坦、壁面は西側が緩やかに立ち上がる。土坑内からはほぼ完形の須恵器杯、提瓶の把手部分などが検出された。



第9図 SB-1 (S-1/80)



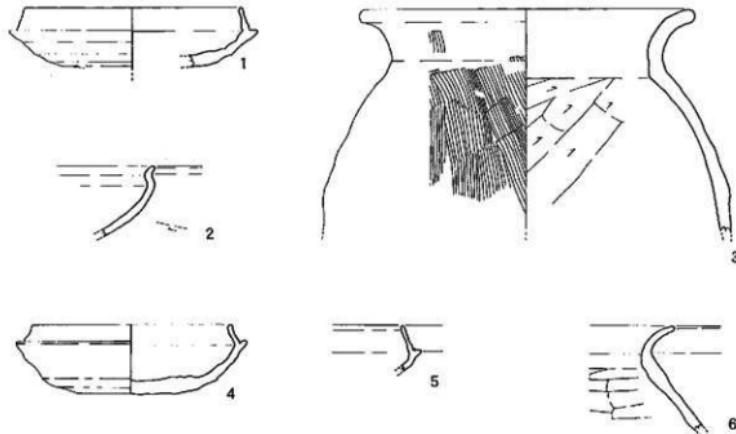
第10図 SK-1, 3, 4, 6 (S=1/40)

### SK-6 (第10図)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形態は円形状を呈する。最大長84cm、深さ70cmである。床面は平坦であり、壁面は急角度で立ち上がる。床面から常に水が湧き出す。土坑内からは土師器甕の口縁部などが検出された。

### 3) 出土遺物

第11図は古墳時代の掘立柱建物、土坑からの出土遺物である。1はSB-1、Pit1出土の須恵器の杯身である。復元口径13.4cmを測る。口縁部はわずかに内傾し、体部下半にへら削りを施す。2は、SK-1出土土師器甕。精製胎土である。口縁部は外反し、体部下半にへら削りが認められる。三光村佐知遺跡において同形態の甕が認められている<sup>(3)</sup>。3は、SK-3出土土師器甕。復元口径20.6cm。体部は長胴で口縁部は短く外反し、外面に丁寧な縱方向刷毛目、内面に斜め方向削りを施す。4・5は、SK-4出土の須恵器杯身。4は、復元口径12.4cm、器高4.2cm。口縁部は内傾した後短く立ち上がる。体部下半にへら削り痕。5は、口縁部が斜め上方に立ち上がる。口縁部は最も薄い所で0.3cmと薄い。6は、SK-6出土土師器甕である。直線的に伸びる体部に短く外反する口縁部がとりつく。胎土には1~2mm大の角閃石が多量に含まれる。これらの遺物は、その形態から6世紀前半~中頃とみて大過ないとと思われる<sup>(4)</sup>。



第11図 SB-1、SK-1. 3. 4. 6出土遺物 (S=1/3)

## ②古代

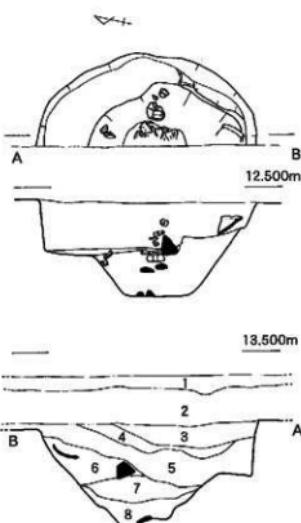
### 1) 土坑

SK-2 (第12図)

調査区の西側中央付近に位置する。遺構の半分は調査区範囲外のため企容は不明であるが、現状で最大長180cm、深さは84cmを測る。土坑内からは被熱した人頭大の礫の他に、輸入陶磁器、黒色土器、土師器小皿、脚付皿、鍋などが検出されている。

土坑埋土は6つに分層できる。1・2は現代や近世の耕作土であり、3以下が土坑埋土となる。3は、土器粒を中量含む暗色砂質土。4は、土器粒を中量含む暗灰色砂質土。5は、3層と同じ、6は、暗茶色砂質土。7は、しまりの弱い暗灰色砂質土。8は、しまりの強い暗灰色粘質土である。

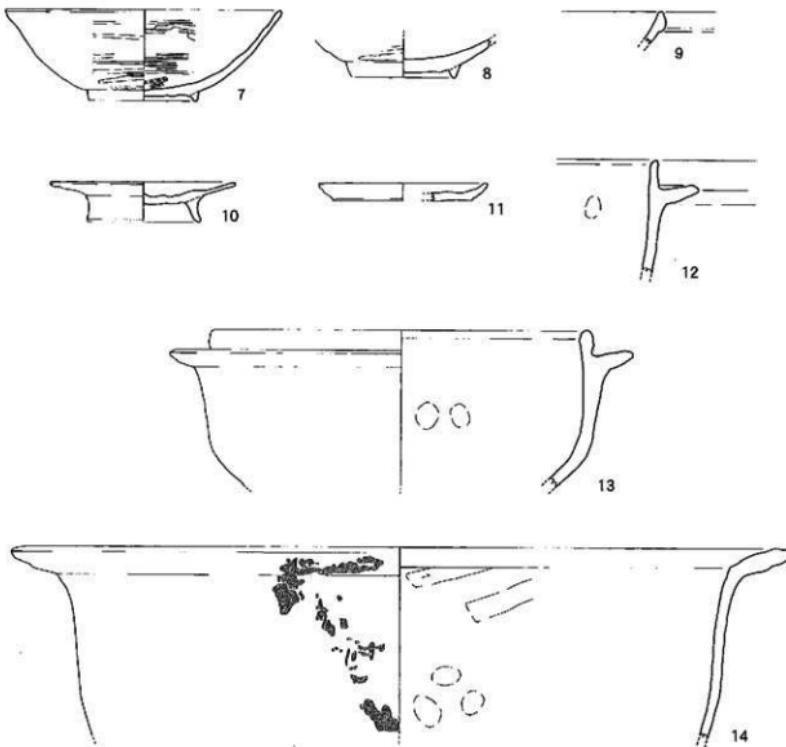
土坑埋土は6層に分層できるものの、第13図-14、上鍋のように4層と6層からそれぞれ出土した土器が接合することや出土土器構成などから、埋没するのに時間幅はなく当土坑はある時期一度に埋められたものと考えられる。



第12図 SK-2遺構図、土層図 (S=1/40)

### 3) 出土遺物

第13図はSK-2出土遺物である。7・8は、黒色土器A類椀。7は、復元口径16.3cm、器高5.5cm。高台は断面三角形、体部はやや内湾気味に伸び口縁部へと至る。内面の見込み部分のヘラミガキは放射状にかき上げ、体部では横方向に施す。外面は全体に横方向にヘラミガキを施す。8は、高台は断面三角形、内外面の調整は7と同様と思われる。9は、白磁の口縁部。口縁端部にわずかな瘤みが認められる。10は脚付皿。口径11.0cm、器高2.4cm。高台径6.8cm。平坦な体部からやや斜め上方に口縁部が伸びる。高台は端部で備かに外反し、器面は回転ナデ調整で仕上げる。11は上師器小皿。復元口径10.0cm、器高1.1cm。体部はやや内湾しながら口縁部に至り、底部は糸切りである。器面は回転ナデ調整。12・13・14は鍋。12・13は、口縁部が直口し外面に鈎がつくタイプ。12は胎土に多量の角閃石を含む。13は復元口径22.8cmを測る。鈎以下の外面には煤が付着し、器面はナデ仕上げを行う。内面には指圧痕が残る。14は、復元口径46.4cm。やや外傾する

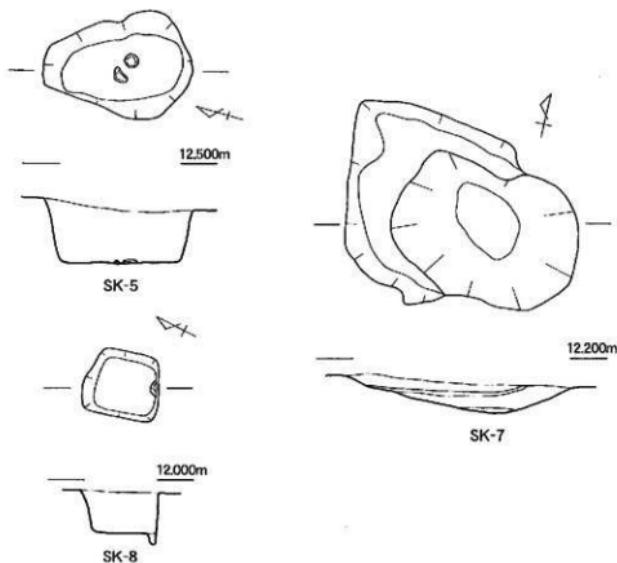


第13図 SK-2出土遺物 (S=1/3)

胸部に屈曲する口縁部が付く。外面全体に煤の付着が認められ、体部内面にはヘラ削り痕や指圧痕が残る。これらの遺物は、小皿や黒色土器の形態から11世紀中頃～後半代のものと推定される<sup>(5)</sup>。

### ③時期不明遺構

#### 1) 土坑



第14図 SK-5, 7, 8 (S-1/40)

#### SK-5 (第14図)

調査区の南西端に位置し、SK-1に近接する。平面形態は橢円形状を呈する。最大長122cm、幅90cm、深さ40cmである。床面は平坦であり、10cm大の礫が検出された。床面から常に水が湧き出す。

#### SK-7 (第14図)

調査区南西に位置し、SK-6・8に近接する不定形土坑。最大長224cm、幅154cm、深さ22cmを測り、平面規模では当調査区中最大。一段テラス面を持つことが特徴。

#### SK-8（第14図）

調査区の中央下、SK-6の東に近接する。最大長64cm、幅52cm。南側で一部小ピット状を呈す。床面は平坦で、壁面は北側で急角度に立ち上がる。

#### ④まとめ

以上、調査によって古墳時代・古代の遺構が検出されたが、いずれも中津地方の歴史を考える上で貴重な資料となると思われる。

沖代条里跡での古墳時代の遺構・遺物は、居屋敷地区や市木地区<sup>(6)</sup>などで検出されている。居屋敷地区では、6世紀後半の竪穴住居跡が検出され、市木地区では同じく6世紀後半の水田祭祀跡が確認されている。今回、新たに6世紀前半～中頃の時期の掘立柱建物跡などが確認された五堆地区が、同時代の遺跡として加わることになるが、これらの地区に後に推定古代官道が走ることは注目すべき点であると思われる。

古代の遺構は、SK-2のみの検出であったが貴重な一括資料となった。当該期の遺構は中津地方にあまり存在せず、長者屋敷遺跡<sup>(7)</sup>で10世紀前葉の遺構、佐知遺跡で11世紀代の土坑が知られるなど数少ない。今回の発見は、11世紀中頃～後半代のものであり、当地方の当該期の研究を補完する役割をもつものと思われる。今後当該期の遺構が推定古代官道沿いで検出されることが考えられる。

#### 註

- (1) 高崎章子「沖代地区条里跡（II）居屋敷地区」『中津市文化財調査報告第18集』中津市教育委員会1997
- (2) 田中裕介氏（大分県教育委員会）の御教示による。
- (3) 坂本嘉弘「佐知遺跡」『大分県文化財調査報告書 第81輯』大分県教育委員会1989
- (4) 中西武尚・服部真和「古墳時代中・後期の土師器－大分県」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後円墳研究会2002
- (5) 宮内克己「弥勒寺」『宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1989
- (6) 高崎章子「沖代地区条里跡 市木地区」『中津市文化財調査報告第17集』中津市教育委員会1996
- (7) 高崎章子「長者屋敷遺跡」『中津市文化財調査報告書第26集』中津市教育委員会2001

## 第4章 中津城本丸南西石垣

### 1. 中津城の歴史と石垣について

豊臣秀吉は1587年、九州平定のため、子飼いの武将達を九州に入国させ、翌1588年彼らによって九州各地に初めて近世城郭が構築された。そのうちの一つである中津城は黒田孝高によって築城された。黒田孝高は豊前六郡の領主として下毛郡に入国し、はじめは大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城した。黒田氏は1600年筑前へ転封となり、細川忠興が入国する。忠興は翌年居城を小倉城に移し、中津には忠利を入れた。忠利は1603年から1620年まで中津城の増改築を行った。中津城三の丸西門の石垣には「慶長12(1607)年9月」という文字が刻まれていたといふ。1620年、本丸・二の丸・三の丸・8つの門と22の櫓が完成し、現在の中津城の形ができるが、現在の石垣は1632年に細川氏が熊本に転封後、小笠原氏が入国する。小笠原氏は中津城下の整備を行い、1652年ほぼ完成したと言われる。その後1717年奥平氏が入国し、1871年まで藩主を勤め、その年城は取り壊された。

現在中津城の石垣は、本丸の周辺と、大手門跡、西門跡に残る。本丸北側には二時期の石垣の切り合うラインがたどれる。西の山国川側が東の石垣の下にもぐっており、西側が黒田の時代、東側が細川の時代と言われている。黒田と言われる石垣は山国川沿いまで続いており、川沿いは非常に残りがよい。川沿いと北側の石垣には、多くの直方体の石が使用されている。これは、平成12年、福岡県大平村で発見された唐原神護石を、山国川を下って運び、使用したものと推測されている。神護石は、一辺を断面L字に切り落とすのが特長で、多くのL字加工痕をもつ直方体の石が確認できた。この石垣の上にのっている東側の石垣には、神護石は見当たらない。また本丸北東隅には天守閣がそびえるが、これは昭和39年に観光用として新設されたもので、天守閣を支える石垣は、広範囲に新しい石積みに替えられている。ただ、石垣基底部は古い様相を



第15図 中津城本丸付近地形図 (S=1/5,000)

示す。

今回調査対象の本丸南西石垣は本丸と三の丸の間に位置している。本丸に通じる道路は明治期に石垣を壊してつくられたものである。道路より西側は、地表面に石垣がそびえるが、東側は昭和24年に、学校敷地拡幅のため現地表面より高い部分は破却され、石は塹に埋められた。西側の石垣は全て自然石を利用した布石崩しの技法でつまれており石垣の勾配は52°～58°、反りはなく、真ん中が最も傾き両端が立つ。さらにゆるやかな輪取りも認められた。これらは、この石垣が最も古い時代の要素を満たしていることを示しており、黒田によって築かれた天正時代の石垣が広範囲に残存していることが判明した。中津城と同年に築かれた九州の他の城は、いずれも現存しておらず、天正期の石垣を見ることができるのは中津城唯一になってしまったのである。

## 2. 調査に至る経緯

中津市は、国土交通省「まちづくり総合支援事業」の一環として、中津城本丸と三の丸の間の堀と石垣の工事に平成13年度から着手した。石垣の傷んだ部分を修復し、埋まった堀をほりあげ、石垣の対岸に遊歩道をとりつけるものである。工事により石垣の文化財的価値を落とすことがないよう、解体前に入念にデータをとり、積み上げるときも当時の技法を復元できるよう細心の注意を払って行った。解体工事では石垣の裏込めの部分までが掘削される。工事には文化財係も立会い、石垣一点一点の調査書の作成、裏込めの発掘調査、塹の調査を担当した。以上工事に直接関わる調査は市の単費で行った。しかし、石垣が掘削されるのは裏込めの範囲までとはいえ、中津城石垣の築造年代を調査できる唯一のチャンスであることから、解体調査と並行して、石垣内部の発掘調査も行うこととし、国庫補助事業で対応することとなった。



第16図 出角工事状況

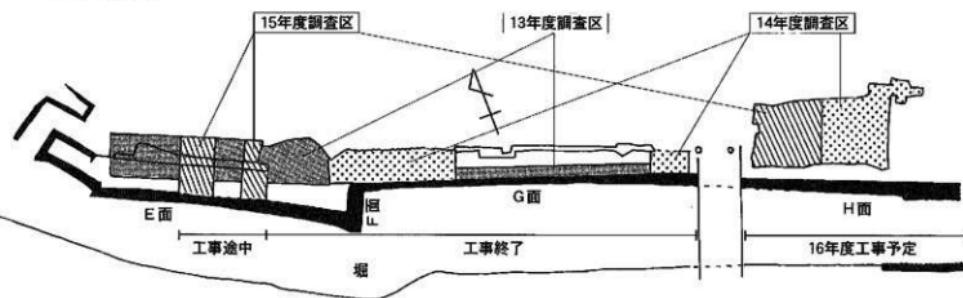
## 3. 工事の概要

13年度、14年度とG面の復元工事を進めた。石積みの方法を一から学ぶため、工事はスローペースで行われた。専門の先生方の指導を受けながら、積んでは崩すを繰り返し一日平均1m<sup>2</sup>の面積を積み上げていった。15年度は二年間かけて習得した技術をもとにして、さらに高度な技術を求めるF面の入角と出角の工事に着手した。F面完成後E面を途中まで積み上げ、H面石垣を掘削し15年度工事を終了した。



第17図 出角工事完成状況

■は石垣



第18図 石垣工事範囲・調査範囲 (S=1/1,000)

#### 4. 13年度14年度調査の概要

13年度は石垣の天端をさげ、城内側の新しい石垣・コンクリートをはずし占い石垣を検出した。E面の裏側では17世紀後半代の遺物が出土する溝状の石列を検出した。またG面の入り角近くにあった忠魂碑を撤去した下から櫓台跡、階段が見つかった。14年度は忠魂碑下をさらに掘り下げ、城内側を向いた創建期の石垣を検出した。さらに大鳥居西調査区の石垣断面からも城内側を向いた古い石垣が検出された。

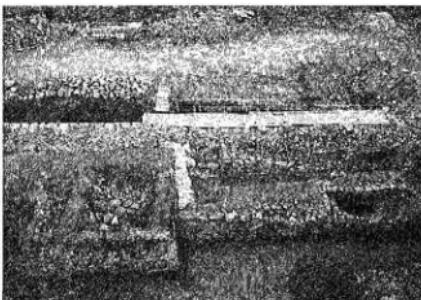
調査の結果、中津城石垣は、最低4段階を経て拡幅されていることが判明した。堀側の石垣は創建期のままで、徐々に城内側にのみ拡幅され、高くされていた。また、椎ノ木門南調査区からは大型礎石が見つかり、黒出期の礎石建物の存在が推定されるに至った。

#### 5. 15年度調査の概要

##### (1)E面石垣

###### ①石列27

E面石垣を解体工事中、14年度に10区調査区、大鳥居西調査区で見つかったⅠ期Ⅱ期石垣に連続すると思われる石列27を標高約4.3mで検出した。石列27は一段のみの石列であるが、かろうじて残った石垣の基底部である。ただ、水門側まで連続するのではなく、出



第19図 G面14年度調査区 北から南を望む



第20図 石列27 西から東を望む

角から約31mほど西に行ったところで途切れ堀へ直角にまがる。右列27より下の堀側の右垣は水門まで連続する。10区調査区ではI期II期右垣の天端幅は約2.4m。石列27の基底部は、最も幅の狭い西側で2mで、天端ではさらに狭くなることが予想される。石列27の東側端では右垣が数段残っており北へ90度に屈曲していたため(第21図)、第4トレンチを設定した。またなぜ西側は途中で右垣が終わっていたのかを解明するため第3トレンチも設定し

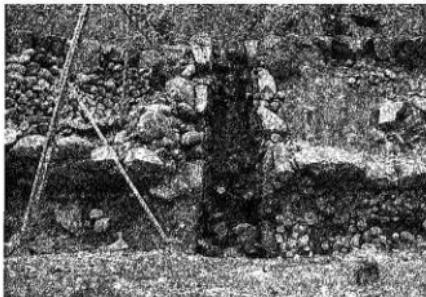
た(第24図)。第4トレンチで右垣を追いかけたところ、屈曲部からから3.25m北で基底部一石を残し途切れていた。第4トレンチの東壁土層では右が途切れた位置まで、断面に20cm大の丸い川原石のみの層があり、右垣裏込めになると思われ、檜台の痕跡と判断した。



第21図 石列27屈曲部

## ②排水溝

石列27には排水溝がとりつけられていた。横幅は約60cm、南北の長さは不明。壁は石を三段積み上げる立派なものである(第23図)。五輪塔の傘を鋼軸用しており、平らな底を内面に使用していた。排水溝の蓋は扁平な大型の石が並べられていたが、攪乱を受けており亂れが大きかった。石列27北側には小石が敷き詰められているが、土層観察の結果、排水溝も右敷きと同時に埋められていることがわかった。



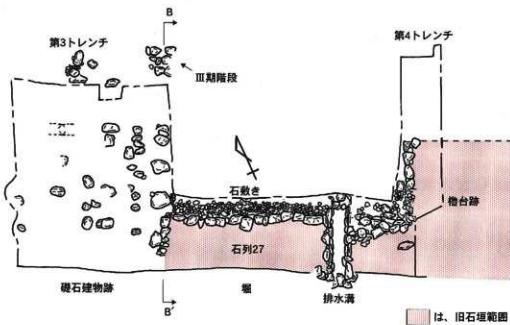
第22図 石列27排水溝



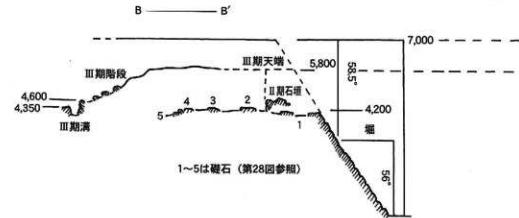
第23図 石列27排水溝壁面

## ③礎石建物

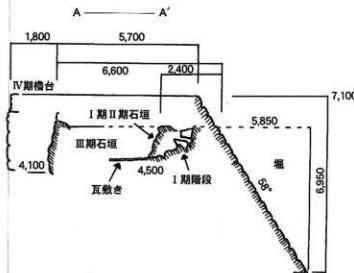
第3トレンチでは礎石と思われる扁平な石を検出した(第28図)。1~5は南北に一列に並ぶが、石の上面の標高がほぼそろうのは2、3、4と1、5である。2が4.3m、3が4.27m、4が4.25mで、1が4.15m、5が4.12mと2、3、4よりやや低い。1は石列27の下にあり5は4の下にある。礎石にも二つの時期差がある。他の礎石の標高は6が4.15m、7が4.2m、8が4.12m、9が4.1m、10が4.2m、



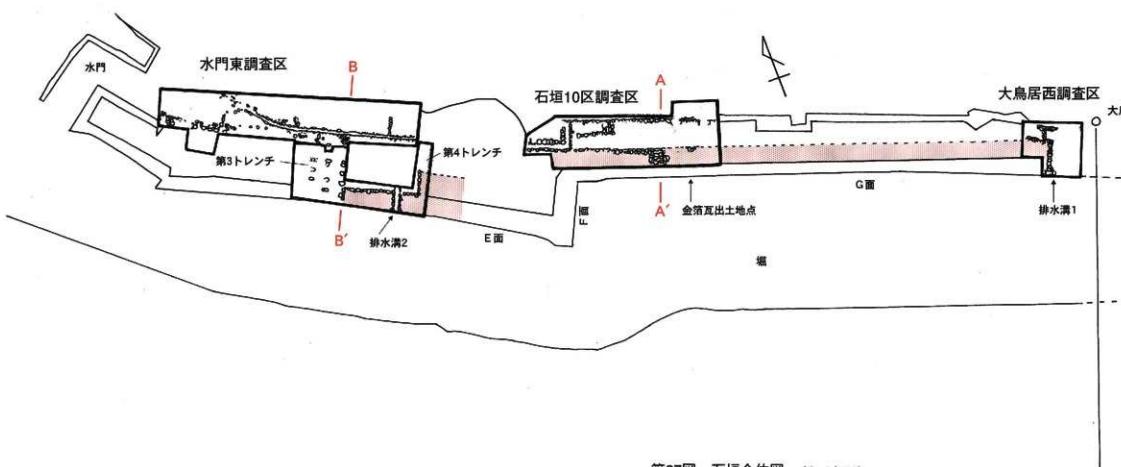
第24図 E面石垣 (S=1/150)



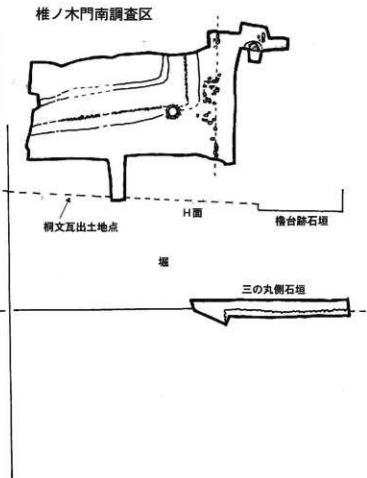
第25図 E面石垣断面図 (S=1/150)



第26図 G面石垣断面図 (S=1/150)



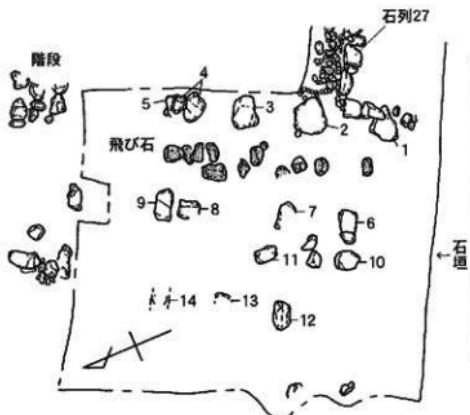
第27図 石垣全体図 (S=1/500)



11が4.25m、12が4.15m、13が4.1m、14が3.95mである。1~5、6~9、12~14は一直線上に並ぶ。この第3トレンチは現在調査中でまだ完掘していない。トレンチの西側部分は礎石の面まで掘り下げられていないため、第28図中13、14は全形を表示できないのが現状である。

現段階でわかる限りの礎石配置としては、1時期目に1~5、5~14の南北3間、東西2間+ $\alpha$ の建物があり、2時期目に2~5の南北2間となる。5の上に4がのり、2~4と1~5が一直線上になることから、2時期目は1時期目とほぼ同一位置にあると考えたい。1~4の礎石は他より大きいことから、12~14は途中の東柱を支えるもので、さらに西側に1~5の礎石に対応する側柱をささえる礎石が存在すると思われる。柱間は6~9、12~14が1.25m間隔、5~14、2~12が2.00m間隔である。8、10、11は礎石が動いたものであろうか。また第28図中網掛けしている石は、礎石より小型でやや乱れはあるものの直線的に並んでいる。飛び石のようなものと思われ、石の上面の標高は4.25~4.35mで、2期目の礎石とほぼ同じである。礎石と右列27北側の小石は同じ土層でパックされている。

礎石周辺からは一定量の遺物が出土した。景德鎮の磁器、備前、瀬戸美濃の小皿、京都系土師器等、いずれも16世紀末までにおさまるものである。また、瓦は主に5、9、14の北側に集中しており、瓦葺き建物の屋根からそのまま崩れ落ちた状態が伺える。出土した平瓦当の文様は第40図4番で、これは小倉城出土のものと同じ文様で、1603年以前の年代を想定されている（註1）。以上を考えると礎石建物は黒田の時代のものと考えられる。また、出土瓦の中に輪違い用の瓦があった。輪違いは瓦の装飾的な書き方で、特別な建物に用いられる。礎石建物の性格は不明であるが、石垣が途切れていることから門を想定したい。しかし、堀に橋をかけなければ渡ることが不可能で、今後の堀の中の調査で橋の痕跡を探す必要性が出てくる。その他、飛び石状の石列があったり、輸入磁器をはじめ皿や天日のかけらなどが出土することから、堀に面した重要な建物があったと考えられる。



第28図 磚石建物跡 (S=1/100)



第29図 磚石建物跡検出状況

#### ④石垣断面

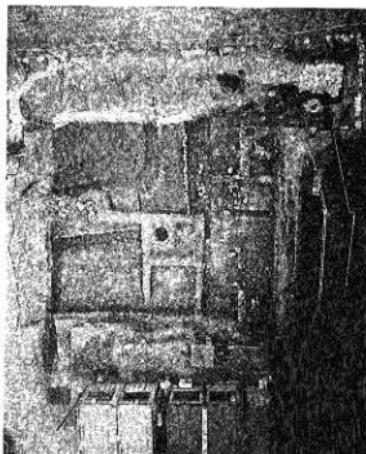
第25図は第3トレーニングの石垣断面図である。第26図のG面石垣断面図と比較してみた。14年度に調査したG面では、I期石垣とII期石垣の天端幅は現在よりかなり狭く2.4m幅で、高さは5.850mと低いものであることが判明している。III期になると天端幅は6.600mに拡大されるものの、高さは同じく低い。現在の標高7.000mになるのは最終段階である。E面では、礎石の標高が4.300mで、G面II期の4.500mと近い数値である。また、E面の土層では土を何層も版築状に積み上げた層の上に、単純な層がある。その層の境に線をひくと、標高5.800mとなり、G面のIII期の天端に対応する。礎石5の北側には三段の段階があるが（第28図）、平成13年に水門調査区で検出した溝状石列から連続するもので、5.800mへと上がっていく土層の上にのる（第25図）。溝状石列と段階はIII期のものといえよう。

中津城は黒田が造り、細川の時に大改造が行われる。1620年には8つの門と22の櫓が完成し現在の中津城の原型ができたとされる。G面の調査で、III期櫓台の位置には、I期II期には櫓がなかったことがわかっている。出土遺物からもII期石垣は17世紀の早い時期に埋められたと考えられ、III期石垣完成を1620年までととらえたい。

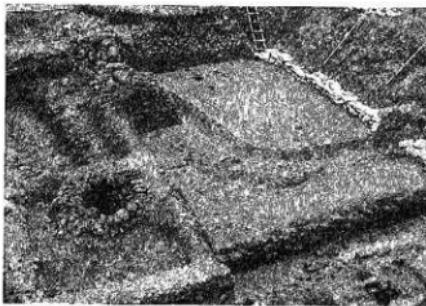
#### (2)椎ノ木門南調査区（第32図）

椎ノ木門南調査区では、平成14年に一部調査を行い、最大径1.6m、厚さ70cmの大型礎石を検出した。礎石の西側に南北に連なる石列2は西に面をそろえ礎石建物の敷地を区画するものと推定された。礎石を掘った掘り方の構造面は標高3.200m、礎石の頭は3.400m。これらを覆う土層に掘り込まれた廃棄土坑から細川時代の遺物が出土していることから、礎石建物は細川以前の黒田時代を想定している。

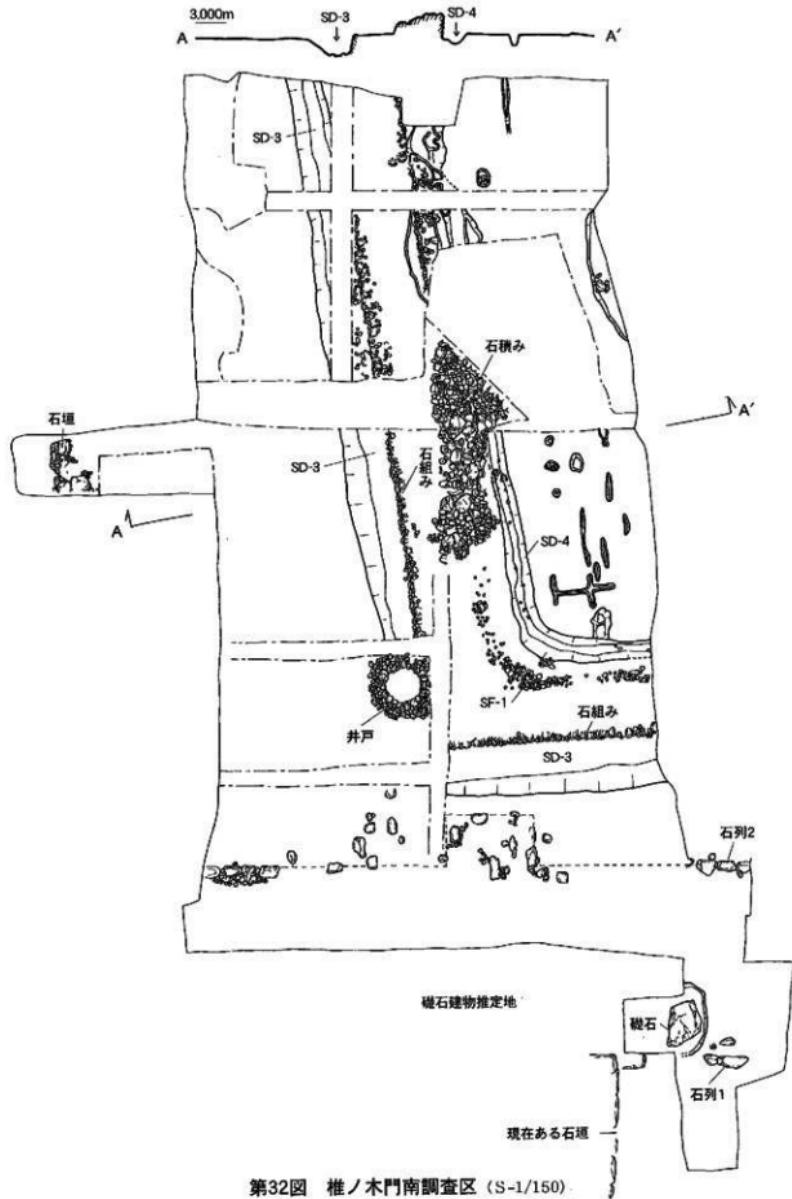
今年度調査したのは礎石建物の西側である。こちらでは礎石建物のレベルからはこれといった遺構は検出されず、さらに掘り下げたところ、標高2.700mで二条の溝SD-3、SD-4を検出した。これらの溝は東西に平行に伸び東隅で90度のコーナーを作り北へ曲がる。溝の間隔は約3m。SD-3は幅約1.5m、深さ約50cmで、断面逆台形。北側と西側の溝壁面には丸い川原石の石組



第30図 椎ノ木門南調査区



第31図 方形区画跡



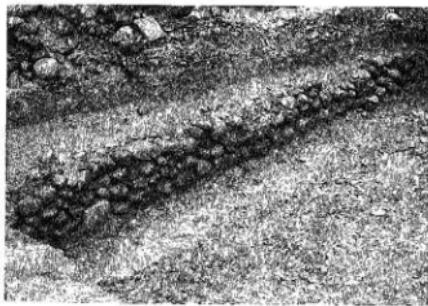
第32図 椎ノ木門南調査区 (S-1/150)

みをはりつけていた。一方SD-4は幅約65cm、深さ約30cmと細く深い。二条の溝の間は平坦で、浅いくぼみに小石をつめたSF-1が確認できた（第35図）。

SD-3の南側は標高2.400mで溝の北側より低い。石組みの様子からみても溝の北側が内部、南側が外部の区画と考えられる。SD-3は外部から内部を区切る溝と考えられ、SD-4との間の平坦面には土手状の高まりもしくは築地壠のようなものが構築されていたのではないだろうか。SF-1はその基礎固めの痕跡ととらえられる。SD-4は土手を支える塙のような施設の布掘りの痕跡の可能性もある。

溝からは多くの遺物が出上した。16世紀中～後半の備前や朝鮮の陶器などで、瓦器碗も出土し、15世紀代の青磁も混入していた。しかし、16世紀末から17世紀初頭に入るような遺物は一点も検出されなかった。調査区東側の礎石建物造構が塙に対して直行するのに対し、溝の方位は塙に制限を受けていない。以上のことから、この造構を黒田入部前の中世の方形居館的なものと判断した。

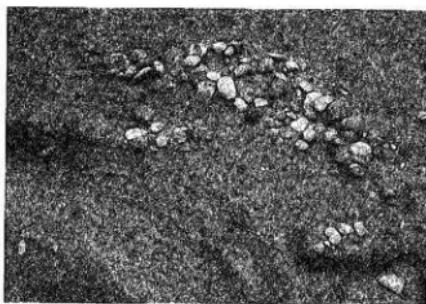
実はE面石垣を解体中、E面の排水溝の下で標高2.700mの地点から遺構面を検出している（第36図）。石垣解体範囲のみという狭い範囲だったので、遺構の全体はみえなかつたが、丸い川原石が面をそろえて並べられている様子が観察できた。塙はこの石列を無視して掘削されていた。この石の面の直上には火災層があった。椎ノ木門南



第33図 SD-3石組み



第34図 SD-3断面図 (S-1/50)



第35図 SF-1検出状況



第36図 E面中世遺構

調査区でも2,700mの遺構面の直上で火災の痕跡が認められている。

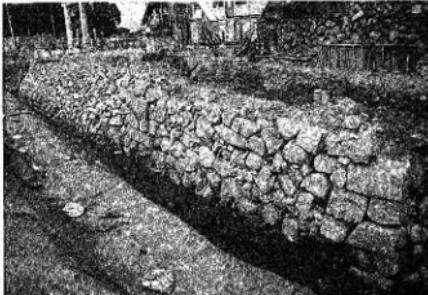
黒田入部以前の中津城はどのようなものだったのだろうか。中津市史<sup>(出)</sup>によれば黒田入部以前は大友氏の支配下にある。1580(天正8)年、反大友との戦を続ける大友方の居城の一つとして豊前中津城が登場する。中津川城とも言われ、この年の3月、中津川表で合戦があった。「中津川城や賀来氏の大烟城は大友氏の最大の拠点として守備している」と記されている。1587年に黒田が入部する際、丸山(中津川)城を修築して入っており、椎ノ木門南調査区内の方形区画は大友支配下の城跡と考えるのが妥当であろう。

### (3)H面石垣

H面石垣は、本来G面石垣と連続するものであるが、昭和24年に学校敷地を拡幅するため上半分が破壊され、下半分は地下に埋められていた。来年度H面の修復工事を行うため今年度その全体を掘



第37図 H面 西から東を望む



第38図 H面 東から西を望む

り上げた。G面石垣は地下に埋まっている部分は状態がよく、下半分はあまり修復の必要がなかったが、H面石垣は全体的にはらみが大きく、かなり下の方までの修復が必要となりそうである。原因に地盤の弱さが考えられる。E、F、G面の地盤が固い砂質のレキ層であったにもかかわらず、H面の地盤はやわらかい粘性のレキ層である。このため石垣が前にずれ大きなはらみの原因となっている。何度も修復した痕跡があり、難な修復がさらに石垣の痛みをひきおこしている。東端には櫓台が形成されているが(第38図)、あきらかに積み方が乱雑で、加工した石を使用している。もともと櫓台はなかったところに、後につくりかえたものであろう。

櫓台の東隅で石垣は北へ折れるのであるが、櫓台の東面を支えるように丸太の枠が検出された(第39図)。一部しか見ることができないが、丸太を方形に組んで石垣横にあ



第39図 H面木組み

て、石を枠の中に落とし込み檜台  
石垣の崩壊を防いでいる。いつの  
時代の工事かは不明である。

#### (4)出土瓦について

中津城の調査で多くの瓦が出土  
した。まだ全てを整理していない  
状態であるが、特徴的な文様の瓦  
を紹介する。

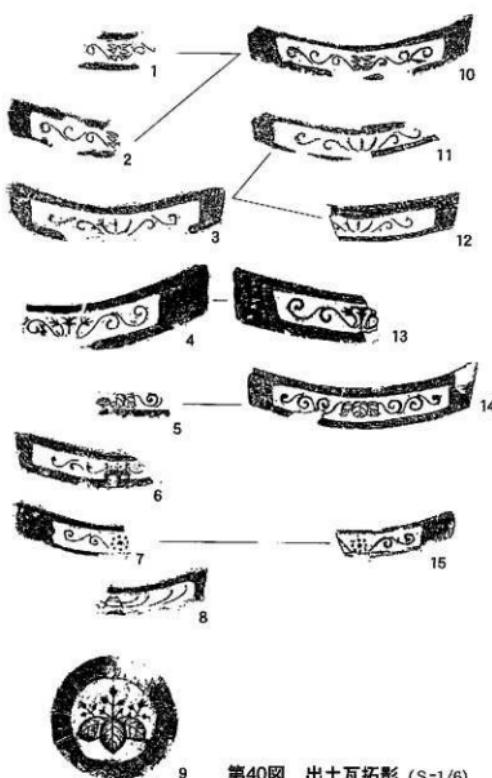
第40図の1、2は幾何学的な中  
心飾りで、1はE面石垣の中から、  
2は大手門の近くの京町御用屋敷  
跡から出土した。10は名護屋城出  
土のもので同范である。<sup>(註3)</sup> 3、4  
は三葉文で、3は中津城から最も  
多く出土する模様の一つである。  
G面10区調査区のI、II期石垣の  
前面、大鳥居西調査区のI、II期  
石垣の前面、E面第3トレンチなど  
から出土。11は名護屋城、12は  
小倉城出土で同范である。4も出  
土点数が多い。主に第3トレンチ  
から出土している。他とくらべて  
大型で、厚いのが特徴である。13  
は小倉城出土。5、6は桐葉文で、  
小倉城の16世紀末の瓦<sup>(註4)</sup>と  
中心飾りが酷似している。6、7、  
8は椎ノ木門南調査区の細川期の  
土坑から一括出土したもの。6は

桐葉の上に花蕾がつくもので、両脇の唐草の巻きがゆるく、5より時代が下がる。8は宝珠文で、唐  
草が真っ直ぐな線状になっていることから、やはり時代が下がるものと思われる。7は九曜文で、  
細川家の家紋。小倉城からも同じものが確認されている。これら平瓦は、共伴遺物や名護屋城、  
小倉城との文様の比較から1～5が黒田期、6～8が細川期と判断した。今後は瓦の同范関係の検討、  
丸瓦とのセット関係、さらに瓦の流通など調査の課題が多い。

このほかに特徴的な瓦として、H面石垣の堀底根石付近から、第40図9の桐文の丸瓦が出土した。  
桐文はもともとは皇族が下賜する紋で、秀吉も使用を許され、自らも配下に下賜した。江戸期にも  
よく用いられた紋であるが、堀出土の丸瓦は、糸切りの痕跡があり、古い時代のものと言える。桐  
文の丸瓦は名護屋城、唐津城、熊本城などからも出土している。平成13年、G面石垣の堀底から出

中津城出土

名護屋城・小倉城出土



第40図 出土瓦拓影 (S=1/6)

土した金箔瓦とともに秀吉とのつながりをうかがわせる貴重な資料である。

## 6. 今後の課題

平成14年度までの調査で、中津城の石垣が黒田時代のものが現存すること、何段階も拡幅されて現在の形になったこと、黒田時代の建物造構が存在することが判明した。15年度の調査では、石垣内より黒田時代の建物跡が検出され、当時の石垣の形がまた一つ明らかになった。黒田時代の遺物も充実してきている。さらに椎ノ木門南調査区の中世居館跡が発見されたのは大きな成果であった。近世以前の中津城の様子は絵図もなく、全く知られていなかったが、黒田が「中津江太郎の居城である丸山城（中津川城）に入った」という伝承を裏付けたことになる。中津城は何もない地に一から築城されたのではなく、中世豪族の居館の上に建てられたのである。今後は黒田期はもちろん、中世造構の検出にもつとめなければならない。また、来年度は石垣工事の最終年度である。各段階の年代決定に最大限努力をする必要があろう。

註1：(財)北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室の佐藤浩司氏のご教示による。

註2：「中津市史」中津市史刊行会1965

註3：名護屋城博物館の高瀬哲郎氏、宮崎博司氏のご教示による。

註4：佐藤浩司「小倉城下の近世瓦—宝珠文瓦・桐葉文瓦と小倉城主—」『関西近世考古学研究X』関西近世考古学研究会2003



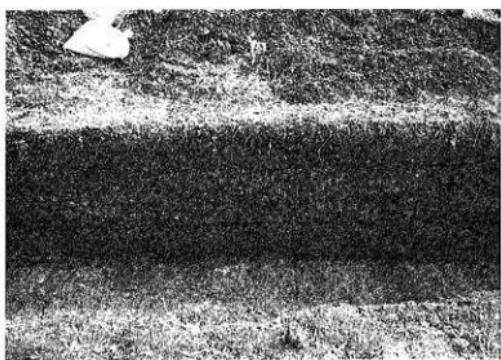
図版 1 大池南遺跡



試掘前風景

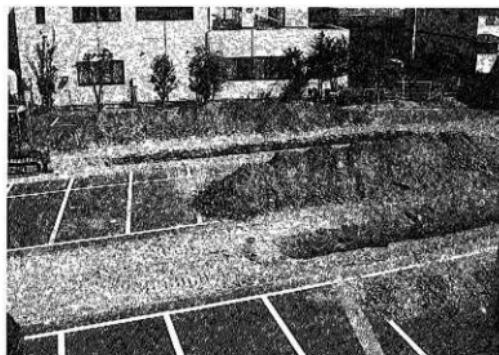


試掘風景  
北→南

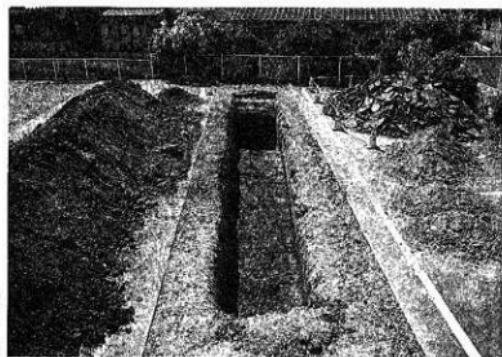


第3トレンチ東壁土層

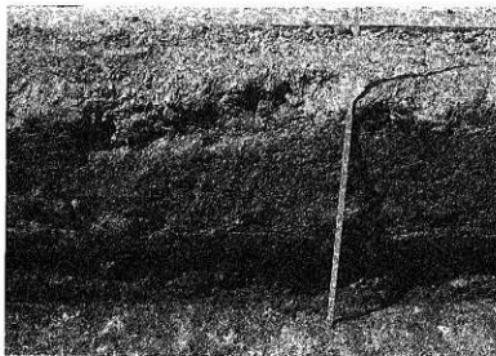
図版2 沖代地区条里跡



矢永地区  
トレンチ状況  
西→東

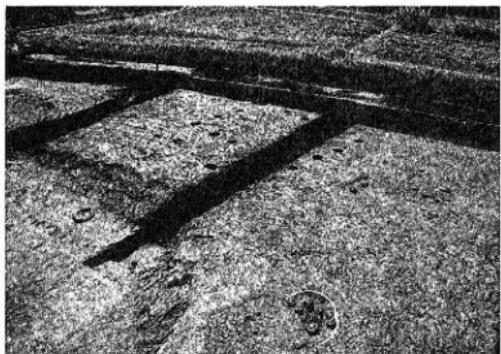


矢永地区  
西側トレンチ  
北→南

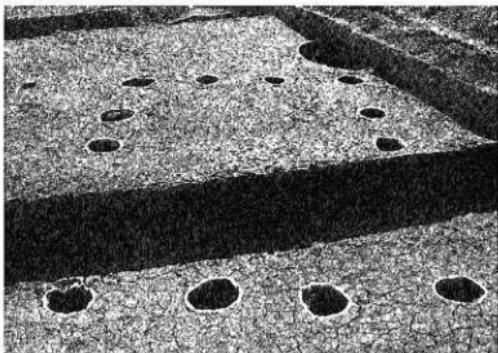


矢永地区  
西側トレンチ西壁土層

図版3 沖代地区条里跡



五唯地区  
調査区全景  
東→西

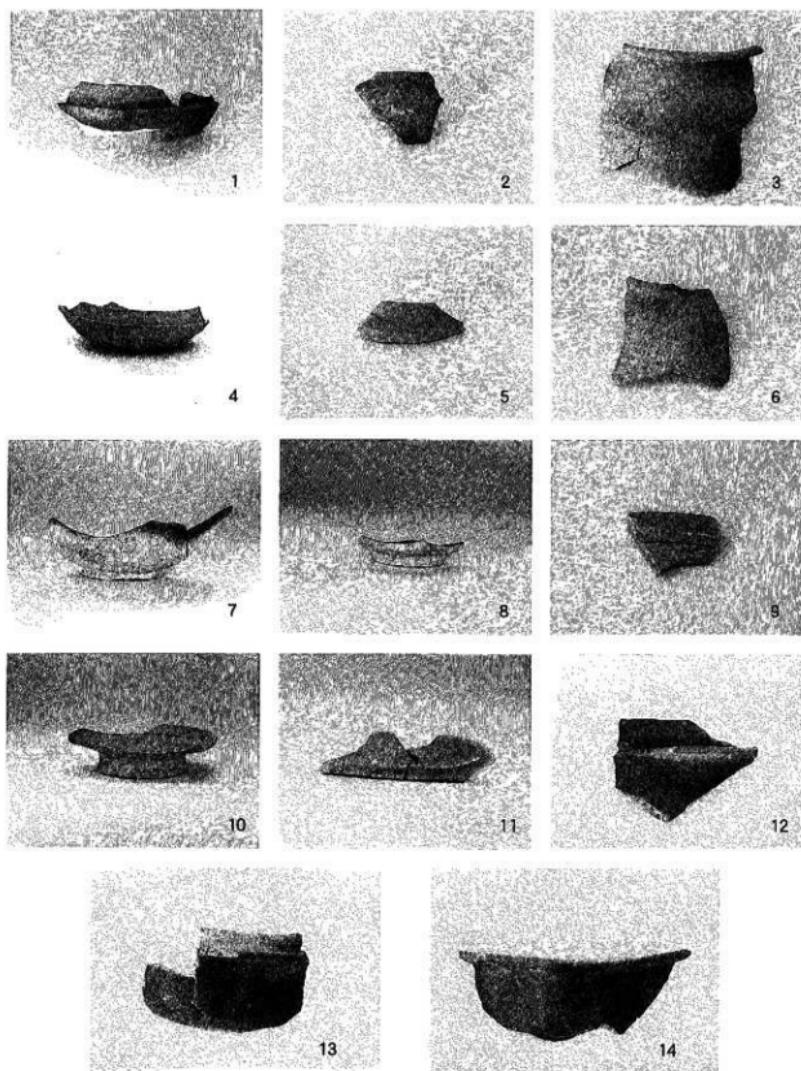


五唯地区  
SB-1  
北→南



五唯地区  
SK-2  
北→南

图版4 沖代地区条里迹



五唯地区出土遗物

# 報告書抄録

書名		おお いはみなみ ひ せき 大池南遺跡 むか だい ち く じょうり あと か なが ち く ご ただ ち く 沖代地区条里跡 矢永地区・五唯地区 なか づ じょうほん まる なん せい いし がれ 中津城本丸南西石垣 (III)						
副書名	2003年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
卷次	16							
シリーズ名	中津市文化財報告							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	高崎 章子 浦井 直幸							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大池南遺跡	大分県中津市 大字永添 2765-37他	44203	101068	33°	131°	2003.12.16	3,461m <sup>2</sup>	民間施設建設
				33°	12'	~		
				24°	10"	2003.12.18		
沖代地区条里跡 矢永地区	大分県中津市 大字宮夫 16-1他	44203	101007	33°	131°	2003.09.26	400m <sup>2</sup>	病院建設
				35°	12'			
				20°	50"			
沖代地区条里跡 五唯地区	大分県中津市 大字万田 318-1他	44203	101007	33°	131°	2003.10.02	311m <sup>2</sup>	アパート建設
				34°	11"	~		
				24°	24"	2003.10.27		
中津城 本丸南西石垣	大分県中津市 1278-1	44203	101001	33°	131°	2003.08.04	600m <sup>2</sup>	保存整備
				36°	11"	~		
				10°	16"	2004.03.31		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大池南遺跡	なし	なし	なし	なし				
沖代地区条里跡 矢永地区	なし	なし	なし	なし				
沖代地区条里跡 五唯地区	集落	古墳・古代	獨立柱建物 土坑	須恵器・土師器 輸入陶磁器				
中津城 本丸南西石垣	近世城郭	中世 江戸時代	石垣、礎石建物 扇形岩塙跡	瓦、陶磁器、 土器		石垣内部に礎石建物 黒田榮城前の中世遺構検出		

大 池 南 遺 跡  
沖代地区条里跡 矢永地区・五唯地区  
中津城本丸南西石垣（III）

中津市文化財報告 第34集

2004年3月31日

発行 中津市教育委員会  
印刷 紫川原田印刷社